

卒論「ルカ福音書に観る弟子像」

イエスに信従する者 — 特に弟子 — にとっての富と貧とは何か

ルーテル神学校生 宮 沢 重 徳

1. はじめに

本論文は、ルカ福音書を研究対象とし、日本のキリスト者が真にイエスの弟子たりえるのか、という問いから出発した。確かに、現状の日本は、豊かで便利である。一般家庭でも、電気製品・車等を当然のように所有し、食物に困ったという話を聞くことは稀である。しかし、その陰には、富む人々と対照的に、未だ貧しい人々が存在し、介護の行き届かない障害者の方々も多いと聞くのである。

私がルカ福音書に焦点を当てたのは、共観福音書の中でルカ福音書が富と貧しさへの言及が最も多く、また「すべてを捨てる」等のラディカルな信従を条件としているからである。そして、それはルカの教会の実情・社会的現実が背景にあり、また、日本の社会の現状と重なるように思えたからである。これまでの諸研究では、ルカの教会が存在した当時は、豊かな社会とも、富者と貧者が混在する社会であったとも言われる。では、実際はどうだったのか。またルカは誰に宛てて福音書を記したのか。ルカの弟子像は如何なるものだったのか。ルカの富・貧への言及の目的は何だったのか。私たち日本のキリスト者へのメッセージは何か。これらのことを明らかにしたいと思った。

2. ねらい

(1) ルカ福音書には次の特徴があるといえる。

- ① イエスへの弟子は「すべてを捨てて」イエスに従う（ルカ 5：11，5：28，18：28）という語を好んで用いる。

- ② ルカ福音書は他共観福音書より、貧者への言及・富者への警告が強く見られる。貧しい者への福音（4：16～22，並行箇所マルコ6：1～6，マタイ13：53～58には，この点で言及されていない）。宴会に招かれる人々は貧者（14：7～14ルカ特殊資料）。愚かな金持ちのたとえ（12：16～21ルカ特殊資料）。金持ちとラザロのたとえ（16：19～31ルカ特殊資料）。徴税人ザアカイ（19：1～10ルカ特殊資料）等。

以上の様なルカの神学における貧富の問題に関しては，二つの異なる研究の見解が見られる。一方は，貧富が単なる経済的概念に留まらず，霊的貧しさ・信従者の模範を象徴するという見解（L. T. ジョンソン他），他方，ルカの教会における社会的経済的実情を背景とする倫理的勧告という解釈（シュテーゲマン，ショットロフ他）である。これらの見解は両極端だが果たしてそうなのか。これらに基づいてルカ福音書のテキストに則して，弟子と貧しさとの関係を明らかにしたい。

(2) 方法論

編集史的方法を取り入れて，マルコ・マタイ(Q)との比較をして釈義して，その特徴が出てきたら，諸伝承を当時の歴史的・社会史的文脈の中で吟味し，可能な範囲で弟子像にとっての富と貧さを検証する。

3. 本 論

ルカだけが，福音書の中央部にこれほど長いエルサレムへの旅行記（9：51～19：27）を配置する。⁽¹⁾ しかも十字架の死へ向かうイエスの旅の途上という極限状況の中で，弟子の条件や貧富の問題が多く語られている。

(1) 釈義結果からの考察（〔 〕内は釈義箇所）

- ① 弟子の条件〔9：57～62，14：25～35，18：18～30，5：1～11〕

○弟子はイエスに従うことを「最も重要なこと」とする⁽²⁾ ので，生活の安定や社会の慣習への望みを葬り去り⁽³⁾，イエスに従って生きること

を第一とする者である。また、この為、人々から拒絶され孤独となることも辞さない覚悟が求められる。⁽⁴⁾

○弟子には、財産・家族への拘りから開放され(ἀποτᾶσσειν), イエスより少なく愛すること⁽⁵⁾ が求められる。また、「神の国」の宣教のために、財産・家族への拘りを捨てる(ἀφίεσθαι) 覚悟をしていく者⁽⁶⁾ である。イエスが、財産や家族に従うかの二者択一の情況に立つ時、弟子はイエスに従う者である。⁽⁷⁾

○イエスの弟子は、イエスと共に十字架へ向かうから、自分の命を守るために信従が危くなるならば自分の命とも別れを告げる覚悟が必要である。⁽⁸⁾ また十分に自己吟味してから従うべきである。⁽⁹⁾

○12使徒は地上のイエスに従った弟子たちに限定される⁽¹⁰⁾, 言わば弟子のモデル。12使徒ばかりでなく、弟子の条件を満たす者は誰でも⁽¹¹⁾, イエスの弟子である。

② 弟子の対象とは〔4:16~30〕

○イエスの弟子としての宣教対象は、徹頭徹尾貧しい人々であった。この貧しい人とは、「物質的に困窮している人々」、「経済的、政治的に無力である人々」、「自分自身の弱さを思い知らされ、神に依り頼む人々」である。すなわち、物質的・霊的に「貧しい人」である。⁽¹²⁾

③ 弟子の富貧の問題〔12:13~34, 16:1~13, 19~30, 19:1~10〕

○イエスの弟子は、自分の持ち物を売って貧しい人々に施す者であり、それは神の国の宣教のための行為でなければならない。⁽¹³⁾

○弟子入りしようとする者、既に弟子である者は、富や「思い悩み」から開放され、神の国を第一に求め、貪欲に身を浸してこの世に依り頼むのでなく神に依り頼み神に服従しようとする者⁽¹⁴⁾ である。

○弟子は、富を神の前で忠実に用いることを求められる。⁽¹⁵⁾ 富を利己的に用いれば、苦しむこととなる。⁽¹⁶⁾ イエスの弟子は、富へのわきまえ、正しい富の運用が求められるのである。

○イエスの弟子は、土地に踏みとどまって生きる者も含む(ザアカイ)。

(4) 弟子の日常生活とは〔14：7～14, 15～24〕

- イエスの弟子は、日常生活の中で極貧者、虐げられている人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招いて仲間となり（14：13, 21）、見返りを求めない施しをする者⁽¹⁷⁾（14：12, 21～23）。そして、孤立し、社会的立場を失うこととなっても（社会的立場への拘りを捨て）、このような人たちと共に生きる者である。

(2) 貧しさの神学とルカの背景

① ルカの教会の背景について

- 使徒言行録 2：44～45, 4：32～35の記事より、ルカの教会には富者と貧者が共存していた。⁽¹⁸⁾ その上で、ルカはイエスの教えを通して、富者と貧者の共存生活に言及している。そして、ルカ福音書におけるイエスの教えは、原始教団で、一時的ではあれ実現したのであろう。
- エスラーらの社会史的な研究成果から、ルカの時代・地域では、極端に富むエリートと共に極貧者もいた。⁽¹⁹⁾ それはルカの教会内でも例外ではなかった。ルカの教会には、富者と貧者の両者が存在し、ルカは両者に向けて、物質的・精神的な両面において告知したと言えよう。

② 貧しさの神学について

○旧約に影響されたルカ

ルカは、旧約・ユダヤ教の「貧しさの神学」の理解を背景にもって、富・貧の問題を扱ったといえよう。それは、ルカ福音書の貧しい人々救済のモチーフが旧約の預言者たちから引き出されている⁽²⁰⁾ こと、ルカ自身がユダヤ教の知識に富んでいること⁽²¹⁾ から考えられる。

○クムラン・エッセネ派からの小考察

ルカ福音書には、貧富の問題、また拘りを捨てる対象として「妻」を加える、という特徴がある。このことから、クムラン教団・エッセネ派の一方、或いは両方と関わりがあったかどうかを考察した。結論として、断定できないが、関わりがあったことは十分に考えられる。

○古代教会への影響

「ヤコブの手紙」, 『十二使徒の教訓』⁽²²⁾ より, またアレクサンドリアのクレメンス, 修道生活の父・バシレイオス等⁽²³⁾ の例より, 古代教会の富・貧への関わりや共同体概念は, キリスト教社会の中で育まれ, 修道制度や社会に対する貧者救済へと方向付けされていった。

4. 結 論

(1) ルカ福音書における弟子像

ルカ福音書の弟子像は, 富者・貧者の両方に存在し, イエスに従う為にあらゆるものをイエスより少なく愛し, 拘りから開放されることが求められる。それは時として, 自分の命よりも神の国の宣教を選ぶという厳しい選択を迫られるが, 弟子はその覚悟をする者である。そして, ルカ福音書のイエスの弟子は貧しさの中にあり, 次の二つの姿がある。

第一に, 物質的な貧しさである。このことは, 「貧者」と「富者」の両者に関わる。「貧者」は, 神の福音を聞き, そのみ言葉により頼む姿そのものを, また宣教の実践によってイエスの弟子である。他方, 富者が弟子である為には, 富から開放され, 富を神の前で正しく運用(貧者への施し)しなければならない。必ずしも全てを献げる必要はないが, 全てを献げる道も供えられている。第二に, それは精神的・霊的な「神の前での貧者」を意味する。すなわち, 例え疎外され孤独となろうとも, 社会的地位や財産に依り頼むことを放棄し, 神にのみ依り頼む者である。

以上から, ルカにおいては弟子と貧しさとが, 密接に結びついている。イエスの弟子は貧者なのである。そして, ルカはこのメッセージを, 彼の教会の現実的な問題に対処する上で, 富者にも貧者にも宛てた。従って, ジョンソンの象徴的解釈や, 物質的な面を強調するシュテークマン等の主張と異なる。ルカは, 物質的・霊的な両面で弟子像を捉えていた。私たちはこの点に立って, イエスの弟子として, 神の前に霊的(信仰)・物質的「貧者」として生きることが求められる。

(2) 現代的課題

現代は、ルカの時代ほど、目に見えて貧困者や虐げられた人々は多くないだろうが、依然として沢山存在する。従って、私たちがキリスト者である限り、社会的・制度的な施し・福祉制度等へ関わって、内外共に富・貧へ関係していくことが求められるであろう。また、教会はその活動を終わりの時まで支え続けるよう、イエスから派遣されていると言えよう。

注

- (1) 荒井献他『総説 新約聖書』日本基督教出版局, 1992 p.106~108.
- (2) 三好 迪『ルカによる福音書 旅空に歩むイエス』, 1996 p.204.
- (3) フランシスコ会 聖書研究所訳注『ルカによる福音書』サンパウロ, 1991, p.116~7.
- (4) J. A. FITZMYER, *THE ANCHOR BIBLE, THE GOSPEL ACCORDING TO LUKE. I-X A NEW TRANSLATION WITH INTRODUCTION AND COMMENTARY* (NEW YORK. LONDON. TRONTO. SYDNEY. AUC-LAND: DOUBLEDAY, 1981), p. 834.
- (5) 三好 迪, 前掲書, p.212~213. フランシスコ会 聖書研究所訳注, 前掲書, p.159~160. 岩隈直『新約 ギリシヤ語事典』, p.309.
- (6) 三好 迪, 前掲書, p.213.
- (7) 三好 迪, 前掲書, p.217.
- (8) 三好 迪他, 前掲書, p.343.
- (9) J. A. FITZMYER, *Ibid.*, p. 1062.
- (10) L. ショットロフ他『ナザレのイエス 貧しい者の希望』日本基督教団出版局, 1978, p.173.
- (11) 三好 迪他, 前掲書, p.220.
- (12) J. G. ダン『イエスの弟子とは誰か』新教出版社, 1996, p.65~70.
- (13) 三好 迪他, 前掲書, p.220~230.
- (14) K. H. レングストルフ『NTD 新約聖書注解「ルカによる福音書」』ATD・NTD 聖書註解刊行会, 1986, p.341.
- (15) 三好 迪他, 前掲書, p.347.
- (16) K. H. レングストルフ, 前掲書, p.412.
- (17) 三好 迪, 前掲書, p.244.
- (18) M. A. ビーウィズ「見返りを求めずに」『インタープリテーション32号』, 1995, p.49.

- (19) P. ESLER, *COMMUNITY AND GOSPEL IN LUKEACTS*, (CAMBRIDGE UNIVERSITY PRESS, 1987), p. 183-187.
- (20) D. P. Seccombe, *Possessions and the Poor in Luke-Acts.*, (Studien Zum Neuen Testament und Seiner Umwelt: Linz, 1982), p. 38.
- (21) 荒井献他『総説 新約聖書』, p. 163.
- (22) P. ネメシュギ校閲『十二使徒の教訓』中央出版社, 1965, p. 17, 19～20.
- (23) M. ヘンゲル, 『古代教会における財産と富』教文館, 1989, p. 90, 146～147, 148～149, 154.